



Letter for Members

日本補綴歯科学会 Japan Prosthodontic Society

<http://www.soc.nii.ac.jp/jpds/>

2001年3月20日

発行人 田中久敏 編集 広報委員会
事務局 〒170 0003 東京都豊島区駒込1 43 9 (財)口腔保健協会
TEL 03 3947 8891 FAX 03 3947 8341

コンテンツ

「第105回学術大会」の見どころ・聞きどころ	1	「認定医制度のしおり」の改訂	8
日本補綴歯科学会のさらなる躍進を望む	2~3	「歯科補綴学専門用語集」の発行	8
どうなる・どうする補綴学会	4~7	ニュース	2, 3, 4, 7
次期本学会理事・監事	8	編集後記	8

「第105回学術大会」の見どころ・聞きどころ

第105回大会を、来る6月1日(金)、2日(土)の両日に、東京・神宮外苑にある「日本青年館」にて、日本大学松戸歯学部補綴学教室の担当で開催いたします。本大会は、21世紀初頭の年にあたり、歯科補綴学の方向をしっかりと見据え、本学会がますます発展するための新たな出発となる記念すべき大会と考えております。そこで、メインテーマを「21世紀の歯科補綴を科学する 口腔機能と全身との関わり」と掲げ、下記のプログラムを企画しました。

特別講演は、現在最も話題となっている遺伝子に目を向け、筑波大学名誉教授・村上和雄先生に「遺伝子は語る 遺伝子がすべて解読された時、人類はどんな可能性を手にするのか」と題してお話を展開していただきます。

シンポジウムは3題を予定しており、その1は「顎口腔機能と脳機能との関わり」と題して、メインテーマに関連する話題の一つとして、人間の機能を司る脳に注目し、顎口腔機能との関係、ならびにその現状と今後に向けてディスカッションを予定しております。その2は、「104回大会」の「加齢を考慮に入れた補綴治療のための検査・診断」に引き続き、「日常臨床における検査・診断方法に関する検討 血液・唾液の生化学的検査・診断」と題して、「検査結果を日常臨床にどのように生かすか」などについての講

演、討議を行います。その3は「歯科補綴臨床の歯科医師臨床研修」と題して、卒後臨床研修の必修化が決まったなかで、本学会としての指針の提示が求められている現状を考え、臨床研修の今後の対応について提言ができればと考えております。さらに、研究教育研修では、「歯科医学におけるレオロジー」のテーマを取り上げております。また、臨床教育研修は「咬合治療の基本」と題した3先生の講演になります。なお、6月3日(日)には、同一会場にて、「第4回認定医研修会」が開催されます。なお、第105大会のホームページが開設されておりますのでご覧ください。
URL: <http://www.mascot.nihon-u.ac.jp/jps105/index.html>
E-mail: JPS105@ml.mascot.nihon-u.ac.jp

(大会長 小林喜平)



☑ 内容豊富な学術大会! 神宮外苑に結集しましょう!

Letter for Members

日本補綴歯科学会のさらなる躍進を望む

日本補綴歯科学会
会長 田中久敏

静かに西暦2001年(21世紀)の初春を迎えた。あまりの静けさに気抜けした感じを受ける。昨年は、「Y2K」に関する話題が豊富で、元旦には緊張を覚えた記憶がある。なにかと気ぜわしい毎日を送っていると、鳴り物入りで、「明日からは新しい21世紀だ! 覚悟して目を覚ませ!」といわれたほうが、まだ気分も落ち着くような気がした。

この2年間、日本補綴歯科学会を新時代に沿うように改革していこうと張り切ったものの、中途半端に終わった仕事も多い。新世紀になったからといって、明日から世の中ががらりと変わるものではなく、ただ結目として、過去を反省し、未来を考えることは大切である。このことに関しては、「補綴誌45巻1号」の「巻頭言」をお読みいただきたい。任期を終えるにあたり、この場を借りて会員の皆様へ対して、お礼を申し述べることをお許しいただきたい。

まず、会員の皆様からの私へのご支援に感謝の意を表したい。皆様のお陰で、それなりの仕事ができたと考えている。

次に、2年間にわたって私をサポートして下さった野首庶務担当理事に深く感謝の意を表したい。会長の片腕である庶務理事として、きめ細かなご配慮をいただき、また補綴学会の代表として鋭意努力をしていただいたことに深く感謝する。同時に、会長幹事の犬塚先生、庶務幹事の小野先生のご苦勞に感謝したい。両先生には、議事録の作成にあたっていただいた。議事録については、皆様方の厚い要望により、一字一句を漏らさずに、議論の内容を包み隠さずに、すべての文言を記載し、文章にいただいた。この議事録がいかにも有用であったかは、理事会にご出席の方々のご承知のとおりである。

次期会長の川添副会長、副会長の大山先生のお二方には、

補綴学会を良い方向に向けていくための幾多のご示唆をいただいたことに対して、厚くお礼申し上げたい。川添副会長とはいろいろな問題について鋭意話し合いを進めながら、次期の日本補綴歯科学会を担う会長として、その発展に御尽力いただけるような多少のサジェスチョンを差し上げることができたと感じている。川添先生の「補綴学会の舵取り」としての手腕に期待したい。

学術担当の渡辺理事、編集担当の古谷野理事の両先生には、「新しい日本補綴歯科学会の在り方」を一緒に考えていただいた。学術大会に関しては、学術委員の方々に、学際的な視野で補綴学会を見直していくためのたいへん多くの努力をしていただいた。ただ、最終的に話し合いをしながら考えていたことは、補綴学会としての将来の演題や課題について、補綴学会員全員がこぞって今一度考え直す時期にきているのではなからうかということである。他学会にみられる考え方、特に生物学的なアプローチを補綴学会のなかに組み入れて、単なるリップサービスでなく、実質的にそれが臨床に応用できる世の中が早くきてほしいと常々考えている。そういう演題や課題に対して十分に応えうる会員が増えることを切に希望して、学術委員長にはいろいろな無理難題を申し上げたが、2年間、片腕としてよく仕事をしていただいた。同時に、学会誌の編集に関しては、編集委員長および各委員には、たいへんなご苦勞をいただいた。2月10日に発行された「45巻1号」を見ていただきたい。私は常々、学会誌は専門性に固執することなく、医療に関する臨床・教育資源を提供する必要があると考えていた。また、論文が備えるべき研究の新規性については、編集委員会の活動と査読制度による研究課題の方向性の確立が急務であると考えていた。補綴学会誌を高度で、国際的に認知されるような内容にしていくために、査読委員会を設置し、査読方法を厳しくするためのご検討をいただいた。その厳しさに対して、ある意味では反論があったかもしれない。しかし、補綴学会として他学会からの評価を受



ニュース 本学会ホームページアドレスの変更

本学会のホームページアドレスが本号ニュースレター第1頁に記載されているとおりに変更されました。今年の11月1日からは、旧アドレスでは閲覧できません。【書】 早めに、「ブックマーク」や「お気に入り」などを修正しましょう。

ける今日であるが、「補綴学会って変わりましたね。この雑誌の内容をみるにつけ、ほんとうによく勉強していることがわかります」との評価を受けていることを自負したい。さらにこれからも、補綴学会誌の内容を充実させていただきたい。このことは、補綴学会としての確固たる基盤を築くばかりではなく、将来の補綴学会を考えると、非常に重要なことであると考え。できるだけハードルを高めながら、国際的に移出できる論文をJPD, ICPなどを通して世界に発信する補綴学会の編集方針と学会誌であってほしいと考える。


会計委員会については、最初の実務担当理事会におけるディスカッションのなかで、「現在の会計業務では赤字になることは必至である」との結論に至った。それについて、何人かの方から、「会費の値上げを検討しては？」との意見が出されたのも事実である。ただし、会計委員長である森戸先生のきめの細かい整理と卓越した才能によって、この2年間、会費の値上げを行わずに、加えて、赤字を作ることなく、そして学会が貧相に行動することなく、大いに胸を張って行動できるだけの会計運営をしていただいた。これは森戸先生の努力が実を結んだものと思う。昨年、あれだけ大きな国際学会を開催しても、学会からの持ち出しは250万円で済んだ。あの大阪での国際学会はわれわれの補綴学会に大きな学術的財産を残したと思う。それが250万円の持ち出しで済んだことは、「良し」としなければな

らないと思う。これは、会計委員会の仕事だけでなく、大会運営にかかわった大阪歯科大学の諸先生および会員全員の努力の賜であったと考える。

最後に、各種委員会の委員長および委員の方々には、ほんとうによく仕事をしていただいたと思う。今のところ、多くの仕事をしたことが6,500名にらんとする会員のすべてに伝達され、内容が理解されたかどうかは疑わしいと思うが、今から先、1年、2年経ったときに、その評価がなされるであろう。諸先生方にはいろいろと無理難題を申し上げたが、「用語集も発刊できた」ということにも胸を安堵させられる。

今後、私が望むことはやはり、日本補綴歯科学会がもっと、もっと躍進しなければならないということである。そのためには、「補綴」という言葉を今から先ずと残していくのか、それとも新しい世代にあった新しい補綴に変わる名前を模索していくのかを考えるべきである。この問題は、川添次期会長に課せられた重要な役割ではないかと考えている。

ほんとうに2年間、今日ここまで頑張ってくれたのも諸先生のご支援のお陰であると考え。厚くお礼を申し上げます。どうもありがとうございました。


 **田中先生、ありがとうございました！ 益々のご健勝をお祈り申し上げます。**

ニュース 10th Meeting of AAP の開催

第10回 Asian Academy of Prosthodontics が本年8月3日（金）から5日（日）までの間、シンガポールで開催される予定です。なお、Keynote speakerとして、福島俊士（鶴見大歯）、小出 馨（日歯大新）の両教授が本学会から推薦されております。

ニュース 9th Meeting of the ICP の開催

第9回 International College of Prosthodontists Meeting が本年10月17日（水）から20日（土）までの間、オーストラリアのシドニーにて開催されます。会場はSydney Regent Hotelです。1991年に、広島で、故 津留宏道教授が4th Meeting of ICPを第86回日本補綴歯科学会と併催してから、早くも10年が経過しました。Burgstock, San Diego, Malta, Stockholm に次ぐ大会ですが、本学会員の参加も回を重ねるごとに多くなってきているようです。

 **ICP のホームページアドレスです。スケジュール等の詳細な情報が掲載されております。**
<http://www.res-inc.com/icp.htm>

Letter for Members

どうなる・どうする補綴学会 前・現・次期学会長に聞く

本執行部における最後のLetter for Membersの発行にあたり、小林・前、田中・現、川添・次期学会長にご参集戴き、広報委員会委員6名を加えた座談会を行いました。この目的は、前会長から現会長への、さらに次期会長へのバトタッチのなかから、本学会の現状と将来を会員の皆様と一緒に考えてみることにあります。4時間に及んで、多くを語っていただきました。

改名問題について

平井：「最初に、学会の改名問題ですが」

小林(義)：「早く解決してほしいの一言につきます。3回のワーキンググループによる議論では、結論は得られず、結果的に田中会長に申し送ることになりました。」

安田：「その後のこの問題の進展は？」

田中(久)：「現時点の認識としては、改名しなくて良かったと考えています。時代の移り変わりが早すぎて、本学会の改名問題は宙に飛んでしまっています。」

小林(義)：「私は、20年前から改名したほうがよいと主張してきました。」

平井：「川添先生、次期会長のお立場で、いかがですか。」

川添：「まず、本日の発言が次期執行部としてのものではないことをご了承下さい。改名問題ですが、診療科名、学会名、学科名のすべてを同じにすることには抵抗感があります。学会名を変える前に、まず補綴学会の骨組みや守備範囲を明確にすべきです。また、本学会の『補綴』の2文字は消すべきではないと思います。」

小林(義)：「どういう領域を守備範囲とするかは時代とともに変わるものです。例えば、医科における外科でも、

相当数に分かれています。『補綴』も総称として良い名称に変更すべきだと思います。」

安田：「改称された大学院講座等の名称として『補綴』が残らなかった。なぜでしょうか？」

小林(義)：「補綴は相当大きな臨床の範囲を担当しているのに、この分野が認知、理解されておらず、小さな領域と同等に扱われたということです。」

平井：「改名問題については、さらなる検討がなされることでしょう。次に、補綴の守備範囲、あるいは歯科全体のなかでの補綴の専門性や位置付けを考えてみたいと思います。」

診療科としての『歯科』について

虫本：「歯学部附属病院の診療科は歯科として一本化し、各々の講座は大学院大学の研究科として存続させるというのが、世の中の流れなのではないでしょうか。」

川添：「世界的にもそういう流れになってきています。」

小林(義)：「政治的、社会的背景などが影響するでしょう。予算の関係が大きいと思いますが、歯科を医科のなかに組み込んでどうかという政治的背景が強いのも事実でしょう。また、社会的背景として財源の問題もあります。」

安田：「開業医などの立場からいえば、もともと歯科は一つですから、認定医制度は逆行しているのでは？」

田中(久)：「医科・歯科一元論と、補綴や保存という区別をなくそうという歯科そのものの一元論もあります。認定医や専門医は、医科・歯科一元論のなかで、歯科を改革することができないと、歯科の将来は難しくなります。これは日本だけの問題ではなく、世界的な流れでもあります。」

安田：「それは、歯科治療の重要性が薄れてきたということなのか、それとも、歯科が学問を進めていくと、結局は医科と同じ方向に行かざるをえないということなのか、いずれですか。」



ニュース 第4回認定医研修会開催のお知らせ

本年6月3日(日)に、第4回認定医研修会が、日本青年館において開催されます。特別講演として「再生医療と補綴治療(仮題)」が、シンポジウムとして「補綴治療の長期経過」が予定されています。また、「認定医ケースプレゼンテーション」も行われる予定です。

☞ 多数のご参加をお待ちいたしております。

田中(久):「後者です。治療よりも予防が重要であるということです。『予防』に入っていないと補綴学はいずれほかの分野に吸収合併されるでしょう。」

小林(義):「田中会長のとおりです。さらに、今までやってきた実績を社会にもっとアピールすべきです。」

『補綴認定医』の今後について

平井:「このような流れのなかで、認定医問題に関して努力された田中会長にご発言いただきます。」

田中(久):「まず、大学人が認定医の専門性を理解しないと、認定医、専門医は生きていきません。また、歯科において、何が専門性として必要なのかというコンセンサスが必要です。さらに、必要性を認めた認定医、専門医の横の連携が必要です。」

平井:「補綴認定医の必要性についてはいかがですか。」

田中(久):「補綴の専門性は必要です。ただ、上手と下手の差が専門医としての差では困ります。」

平井:「診療科として『歯科』に一本化されたとしても、補綴の専門性、認定医は残ると解釈してよろしいですか。」

田中(久):「結構です。私としては、歯科全体を一本化した『歯科認定医』を作るべきではなく、3つか4つの専門領域を作るべきであると考えます。」

安田:「補綴医を標榜できない限り、認定医をとったところで看板も出せません。国民に対して、『補綴認定医』が義歯の上手な人であることを認識させるようにアピールすることすらできないのが現状です。まだその前にやるべきことがあるというのが田中会長のお考えですか。」

田中(久):「そうです。日本歯科医学会の16分科会がすべて認定医制度を作るという動きがあります。この必要性については議論もあり、整理が必要です。」

安田:「補綴学会の認定医はメリットがないといわれていますが。」

田中(久):「メリットの追求ではなく、制度は補綴学や補綴治療の向上を図るための施策であると考えています。」

小林(義):「同感です。まず、補綴医が自身のクオリティを高めるべきです。メリットを求めるのではなく、中身を改革すべきです。」

川添:「学会として、専門性を高め、高度なことができ

るということをアピールすべきです。ただし、補綴の専門性がどこにあるのかということに関して、なかなかコンセンサスが得られないのが現状であり、問題点でもあります。また、専門医として何ができるのかという基準を作るべきです。」

法人化について

平井:「次に、法人化についてですが、田中会長は法人化のためのワーキンググループを立ち上げられました。小林前会長は以前からそういうお考えであったと認識しています。川添先生はいかがでしょう。」

川添:「法人であれば、国や機関に対しての発言権があります。また相手はそれを無視できません。これが法人化の一番のメリットでしょう。また、収益事業も行えるようになります。このためには、現状の6,000人という会員数を維持もしくは増加させないとだめです。これが可能であれば法人化はやるべきです。」

平井:「田中会長、この件について、いかがですか。」

田中(久):「現状の体質では、法人化してもあまり意味はありません。しかし、法人化することにより学会としての価値観が変わることを期待します。これが、法人化のもっとも大きなメリットです。もちろん、財政基盤の整備も必要です。」

小林(義):「政治活動という誤解があるといけません。法人化によって学会として適正な意見を主張できる体制を作ることが可能となるということです。」

平井:「川添次期会長はどのようなお考えですか。」

川添:「結論はまだ出しておりません。次期執行部のみなさんと相談して決めていきたいと思います。」

学術大会について

平井:「次に、学術大会と学会誌についてですが。」

小林(義):「大会運営は学校単位の順送りではなく、学会が大会長を指名する方法に改めるべきです。そのためには、学会組織が充実していないといけません。もう一つ、世界の主要学会の学術大会は、Annual meetingです。検討が必要です。」

田中(久):「年2回開催はたいへんですが、それなりに

Letter for Members

意義はあります。ただ、有用なデータを提示できる演者が少ないのも事実です。学際的なテーマを掲げてピントのずれた内容が出てくるときもあります。また、各講座の主任教授は研究の方向性を変えていかなければいけません。」

川添：「同感です。シンポジウムではテーマを決めても実際にデータをもっている人を捜すのがなかなか難しいのが現状です。学会として求めることをはっきりさせて、それぞれの大会ごとに顔を作っていくべきです。また、宿題報告や臨床報告を充実させるべきです。さらに、学術大会の準備や企画を早めるべきです。」

小林(義)：「先ほどの発言に追加させていただきますが、時流に乗った問題について補綴歯科学会が宿題報告のような形で見解を表明すべきです。また、会員の過半数を占める開業医にとって魅力のある学会とするために、臨床部門の企画を今以上に多くすべきです。」

沖本：「臨床の最前線にいる一般開業医にシンポジウムの枠を、企画も含めて委ねるのも一つの方法かもしれません。若いながら立派な仕事をしている人が多くいます。」

小林(義)：「大山副会長が以前提案していましたが、顎顔面補綴学会などの補綴関連他学会との併催や、学会の統廃合などを視野に入れてはどうでしょう。」

平井：「学術大会に関して、広報委員の皆様から何か。」

安田：「2回ほどプログラム委員を務めました。明確な評価を行い、不適當なものはrejectすべきでは。」

川添：「rejectに関しては異論があります。判定が難しいし、レフェリーの質の問題もあるでしょう。」

田中(久)：「プログラム委員会の設置は私が指示しました。当初は、rejectすべきものには毅然たる態度で接して、質の向上を図るとの意図でしたが、判定する基準が難しいようです。」

小林(義)：「プログラム委員会は絶対に存続しなければなりません。学会誌で投稿論文を査読しているのですから、学術大会の演題も当然、審査すべきです。」

虫本：「すべての演題を採択しようという意図はわかります。しかし、現状でプログラム委員会は機能していますか?」

安田：「私の経験では、修正を指示した箇所はすべて修正されてきました。機能していると思います。」

田中(昌)：「第104回大会にかかわった立場からいいますと、最初に提出された抄録にはかなりひどいものもありました。プログラム委員会はきちんと各抄録をチェックしています。」

沖本：「委員会の査読結果をそのまま演者に送ったときに、その講座の教授から怒鳴られたことを経験しています。」(笑)

田中(久)：「機能していると思います。今後は、採択の基準を明確にすべきと思います。修正を指示されて怒鳴ってくる教授がいるのは困りますね。」(笑)

学会誌について

平井：「次に、学会誌についてですが。」

田中(久)：「学会誌は学会の表看板です。査読方法、投稿規定を変更し、統計処理も専門家に依頼するようにしました。加えて、臨床的意義を記載することにしました。本年2月発行の45巻1号をみていただければ、補綴誌が変わったことがわかってもらえると思います。さらに、良質な論文が多く望まれます。」

平井：「学会誌の質はかなり向上したわけですが、川添先生、英文誌の発行についてはいかがですか。」

川添：「何らかの形で実現したいと思います。ただし、現状からいきなり英文誌が可能かどうかは疑問です。まず、和文誌をさらに良質なものにすべきでしょう。もちろん、世界への情報発信は不可欠であり、英文誌は必要であると考えます。」

平井：「各大学でも欧文論文の評価が重要視されてきており、補綴誌に英文で投稿するのならば、海外の雑誌に投稿しようという人が多いのではないのでしょうか。」

川添：「確かに、投稿してくれるかどうかが問題です。学会としてある程度支援するという必要かもしれません。」

平井：「本学会は国際渉外委員会を通じて、JPDへの投稿を推奨していますが、これとの絡みはいかがですか。」

田中(久)：「JPD、IJP、JORなどへの日本からの投稿が増えています。Impact factorなど、いろいろと問題はあるでしょうが、1年に英文誌を1号出すことから始めるべきでしょう。」

小林(義):「ホームページにタイトルとアブストラクトだけでも載せる方法はないのですか。」

小林(博):「可能ですが、著作権の問題があります。今後発行される雑誌については、掲載することは可能です。」

田中(久):「アメリカの大学院生には、日本の補綴誌が英文にされていないので、これを利用して自身の研究に盗用する者がいます。アブストラクトはメッドラインに載るようにしたほうが良いでしょう。」

小林(義):「次期会長のもとで検討して下さい。」

広報活動について

平井:「最後に、田中会長が広報委員会を立ち上げ、われわれが2年間活動してきたわけですが、この広報委員会活動について、小林先生、いかがでしたでしょうか。」

小林(義):「他学会のようなありきたりのニュースレターとは違って、おもしろいと感じています。」

平井:「ニュースレターのスタイルについては経費の問題、広告の問題などもあり、若干変更しました。田中会長、総括をお願いします。」

田中(久):「ニュースレターに関しては、私自身もかなり時間を費やしました。形としてかなり良くなってきました。今後、あまり人の手を煩わせず、広報委員会で書いていただきたいと思います。」(笑)

平井:「ニュースレターは会長ならびに執行部の意見を会員に広く知らせることが重要であると認識しており、結果的に、お手を煩わせることになりました。申し訳ありま

せんでした。川添先生は、どのようにお考えですか。」

川添:「ニュースレターには、学会の理事会の決定事項や雰囲気客観的に忠実に伝えてほしいと思います。また、おもしろい記事などはコラム欄等で取り上げてほしいと思います。加えて、ホームページの充実が望まれます。」

田中(久):「本学会のホームページのアクセス件数はほかに比べていかがなのでしょう。」

小林(博):「少ないです。興味ある内容があれば、会員からのアクセス件数も増えるのではないのでしょうか。」

田中(久):「オンラインジャーナルの件はいかがですか。」

小林(博):「無料でやってくれますが、過去のものには著作権の問題があることなど、いろいろな問題はあります。」

田中(久):「アクセスしてコピーする費用は?」

小林(博):「もしもオンライン化するとすると、印刷すると有料ということになりますが、会員と非会員の区別をどうするかなど、いろいろと問題があります。」

川添:「講演抄録等もホームページ上で送れるようになると便利なのでしょうね。」

平井:「次期執行部に期待したいと思います。すでに予定の4時間を過ぎてしまいました。これで、本日の座談会を終了させていただきます。ありがとうございました。」

(平成12年11月20日(月)13:00~17:30,東京・八重洲クラブ会議室にて収録)



ニュース 次々期会長候補者選出方法の改正

本年2月23日開催の理事会において、「日本補綴歯科学会細則～役員選出に関する内規～の中で、会長の選出(第2条)ならびに副会長の選出(第3条)」の修正に関しての審議がなされ、従来行われていた「第一回投票での2名連記」を「1名单記」へ、また、「第一回投票による得票数上位3位までの者にあつて、被推薦者となることを受諾した者を、人数にかかわらず第二回投票の被推薦者とする。辞退者は補充しない」、「第二回投票の被推薦者は所信表明を行う」ことなど、改正がなされました。さらに、評議員の投票によって総会に推薦される者を「次々期会長候補適任者」、総会で承認を得られた「次々期会長候補適任者」を「次々期会長候補者」と呼称することになりました。したがって、「次々期会長候補者」が「次期会長候補副会長」となるわけです。



原案を作られた会則等検討委員会(佐藤 志委員長)のご努力に敬意を表します。

Letter for Members

次期本学会理事・監事

昨年、大阪での本学会総会において、以下の理事および監事が承認されておりますので、お知らせいたします。なお、会長および次期会長候補副会長は全評議員の投票により総会において、会長委嘱副会長は理事会の推薦により決定されます。

川添堯彬（会長）、 大山喬史（次期会長候補副会長）、
川和忠治（会長委嘱副会長）、 平井敏博（庶務担当）、
岸 正孝（会計担当）、赤川安正（学術担当）、
細井紀雄（編集担当）、 川崎貴生（教育問題検討）、
古谷野 潔（国際渉外）、 井上 宏（用語検討）、
伊藤 裕（医療問題検討）、 天野秀雄（会則等検討）、
河野正司（ガイドライン作成）、 山内六男（広報）、
石橋寛二（認定審議会）、渡辺 誠、浜田泰三、甘利光治、
以上18名

監事：森谷良彦、保母須弥也、以上2名
の各氏です。なお、会長幹事としては、田中昌博先生（大
歯大・歯・有歯補綴咬合）が、庶務幹事としては、石島 勉
先生（北医大・歯・補綴1）があたることになっています。
☞ 未だ数々の問題が山積しております。2年間、よ
ろしくおねがいいたします！

「認定医制度のしおり」の改訂

本学会の認定医は1,264名（平成12年11月現在）です
が、金曜日・土曜日の学術大会開催による規定単位の修得
の困難さや、新規申請者にとって研修機関が身近にないこ
となどの改善点が挙げられていました。これらを踏まえて、
認定審議会（細井紀雄委員長）は認定医制度規則を改定し、
本年2月23日の理事会で、「認定医制度のしおり・平成13
年3月」を提出しました。38頁からなる小冊子ですが、
本ニュースレターと時期を同じくして、皆様のお手元に届
くはずですよ。

☞ 認定審議会の皆様、お疲れさまでした。

「歯科補綴学専門用語集」の発行

用語検討委員会（田中貴信委員長）が4年間にわたり編
纂を進めていた標記用語集が、このたび医歯薬出版から発
売されました（本体2,500円＋税）。先のニュースレター

でもご紹介しましたとおり、719語について明確な解説を
加え、実用性を備えたものです。「諸般の事情により、会
員の皆様にもご購入いただかなければならないことは心苦
しいことですが、ぜひ、ご一読下さい」との委員長からの
ご伝言も寄せられています。B6判、150頁、斬新なデザイ
ンのソフトビニル表紙で、白衣のポケットにも入るコンパ
クトなものです。若い医局員や学生にも利用価値の高いお
勧め品といえます。

編集後記

任期最後のニュースレターをお届けします。本広報委員
会はこの2年間にニュースレターを4回、その予報および
号外を4回発行しました。

本号には、田中会長から、われわれ会員の支援に感謝す
る内容のご寄稿がありました。田中先生、この2年間、ほ
んとうにお疲れさまでした。また、小林・前、田中・現、
川添・次期学会長と広報委員会委員6名による座談会を行
い、ほぼそのすべてを掲載しました。いかがでしたか？

本学会にとって、ニュースレターの発行は初体験であり、
手探り状態での出発でした。そのため、経費や広告などの
問題によるスタイルの変更などもありました。しかし、本
号の座談会における小林前会長のご発言にもあったとお
り、田中会長の絶大なるご協力のもとに、それなりの評価
を受けていると認識しております。会長ならびにご意見
をお寄せいただいた会員の皆様に心から感謝申し上げます。

最後になりましたが、サポートくださった5名の委員と
幹事に厚くお礼申し上げます。（平井敏博）

学会へのご意見・ご要望をお寄せください

〒061-0293 北海道石狩郡当別町字金沢1757
北海道医療大学歯学部歯科補綴学第1講座
日本補綴歯科学会広報委員会

委員長：平井 敏博

委員：沖本 公繪 小林 博 田中 昌博
虫本 栄子 安田 登

幹事：石島 勉

Tel & Fax : 01332-3-1425

E-mail : kohojpgs@hoku-iryo-u.ac.jp